

悪漢小説としての松本清張「一年半待て」

～実体なきヒロインの行方～ その1

鶴田武志

「一年半待て」(『週刊朝日別冊・新緑特別読物号』1957・4)は、2024年までに12回、テレビドラマ化されている。したがって、松本清張作品の中では比較的良好に知られた短編小説と考えられる。連載時から単行本、全集、文庫と特に移動も見られず、掲載時に完成されていた作品と言えるだろう。松本清張は、本作の粗筋を次のように説明する。

ある人妻に好きな男が出来て、そのため亭主と別れたく思っている。しかし、亭主は別れてくれないので、殺そうと考えます。殺せば罪が発覚するわけですが、発覚しても、なんとか短い刑期で済んで、出所したら晴れて一緒になりたいという計画を立てたのであります。これがうまく凶にあたって世間の同情をよび、特別弁護人も出るありさまで、まんまと思いどおりにいく。ところが測らずも計画が崩れるというテーマであります。(「小説と素材」(江戸川乱歩・松本清張編『推理小説作法』(1959・4))

つまり完全犯罪を目論んだ知能犯の人妻が、思わぬ死角から罰を受ける話であるというのだ。また、清張は「一事不再理」という条文があり(中略)これからヒントを得て」本作を書いている。法の抜け道を悪用するという点からも犯人の冷徹さが窺えるだろう。

平野謙は、こうした清張の弁を引いて、清張の「推理小説の人生的社会的な特徴がイロニーッシュにうきでていると私は思う」(平野謙「解説」(『張込み 傑作短編集(五)』(1965・12))と述べる。言い換えるならば、「なぜ特定の犯罪が犯されなければならなかったかが、いわばその社会的必然と個人的必然の両側面から追及される」(同上・平野)という、巷に言われる清張以後の推理小説の特徴、動機主体がよく出ているということだろう。この場合、「社会的必然」が一時不再理という法が持つ盲点、そして「簡単には離婚出来ない妻」が個人的必然(社会的必然も若干含む)と言えるだろうか。いずれにせよ、「一年半待て」を、代表的な清張作品としてカテゴライズしている。

確かに本作では、一事不再理で社会的には裁かれない犯人が愛した男には裏切られて落とし前が一応つけられるという体裁になっている。しかし、それは結末の部分に触れられるだけのことであって、作品全体を支配しているわけではない。「一年半待て」は、須村さと子による夫、要吉殺害事件のあらましと公判の経緯が描かれた第一部と、さと子の特別弁護人だった高森たき子のもとを訪ねた岡島が、第一部で語られた事件をひっくり返す第二部で構成されている。一見、さと子が執行猶予の判決を受けることが妥当に見える事件が裏返るどんでん返し読みどころである。一事不再理は、第一部のミスリードをひっくり返す事件の真相を補強する材料の一つに過ぎない。

また、犯人が思わぬ罰を受ける結末でありながら、その結末に犯人であるさと子は登場しない。事

件の真相を突き付けられるのは、彼女を弁護した高森たき子だ。したがって、真相を知ってしまうたき子の様子が描写の中心となる。このことは、物語の焦点が、犯人の止むにやまれぬ犯行の動機を暴くことよりも、犯人を執行猶予という形でほぼ無罪同然へと導いた高森たき子の社会的な責任に当てられていることを意味している。さと子の完全犯罪を成立させたのは、彼女を後押しする世論を生み出したたき子だからだ。

つまり、清張の述べた「一年半待て」のテーマとは、作中で扱われる事件の題材の説明に過ぎない。また、それを真に受けた平野の解釈もまた一面的な作品の理解に留まり、一事不再理を利用した犯人の完全犯罪を成立させた社会的背景を穿とうと試みる作品の狙いを正確には評価できていないと言えるだろう。

ただ、その一方で、平野に代表されるような、須村さと子が夫殺しに至るまでの、止むにやまれぬ社会的、個人的事情に焦点化された解釈が、流通しているのも事実だ。それは12回も作られたテレビドラマ化による影響が大きいだろう。さと子を主演に据え、夫に苦しめられた人妻が救いとなる純愛のために殺人を犯し、その結果、相手の男に去られてしまう哀しい結末を迎える…これが、さと子を主演にしたテレビドラマ版（2016年版を除く）の基本的な構成だ。あくまで真実の愛に目覚めた女性の純愛の果ての殺人という哀しい物語として描かれる。そこには、原作にあった、法律の隙間を悪用し、一年半にも渡る計画を確実に実行していく知能犯の冷徹さはなく、また彼女を無罪に導いた社会の問題も後景化されている。そして、こうしたテレビドラマが、60、70、80、90、00、2010年代と定期的に作られたことで、哀れな女性の物語というイメージは定着してきた。

何故、原作の描いた犯人の非情さ、作品が狙った社会的問題はテレビドラマによって捨象されてしまったのか。そこには、原作とテレビドラマ化との間にある表現構造上の溝、またテレビドラマに視聴者が期待するものとの落差が横たわっていると考えられる。そこで「その1」である本論では、これまで考察が、疎かにしてきた原作の表現構造や構成について明らかにしてみたい。そして、「その2」においては、それがどういう形で映像化されたかをいくつかの事例を比較検討する。それによって、原作のテレビドラマ化で何が起きているのかを探ることができるだろう。

1. 須村要吉殺害事件の概要から見える真相への裂け目

(1) さと子が要吉と結婚した理由

本作は、須村さと子による夫、要吉殺害事件のあらましと公判の経緯が描かれた第一部と、岡島が、高森たき子に事件の真相を突き付ける第二部で構成されている。こうした二部構成の場合、第二部がどんでん返しとして機能するためには、第一部を隙のない事件の経緯として読者を信用させなければならない。一方で、それが実は歪みを持っていないなければならないという二律背反を抱えている。

そこで、語りは「まず事件のことから書く」という形で始める。この一文によって、ここから始められる話は、作中の事実に基づくものであると読者は錯覚させられる。しかし、そもそも、犯罪の事実があるだけでは、事件とはならない。事件とは、ある出来事を警察が犯罪として扱い、それがマス

コミなどに取り上げられ世間に周知されることで初めて事件となる。つまり、公権力による認定と世間の認知が、事件を事件とすると言えるだろう。したがって、「事件のことを書く」ということは、世間に事実として、流通したものを時系列に並べて整理するというだけでしかないのだ。新聞や雑誌、ラジオなどマスコミで流れたであろう情報や供述書といった裁判資料などを使用することで、一定の客観性は担保され、流通している事件の物語が持つ恣意性は巧妙に隠されていく。したがって、本作は一見、担保された客観性の隙間にある仕掛けを、一つ一つ読み解いていく必要がある。

まず、最初に須村さと子の人となりと要吉との結婚、その生活について語られる。事件当時のさと子の年齢は29歳だ。1954年に石垣綾子が、世間が結婚を勧めても女性が30歳になると、その機会が極端に減る指摘している¹が、このことは当時の結婚適齢期の境が30歳あたりにあったことを示している。石垣の指摘は独身の職業婦人についての話であるが、再婚であっても同様だろう。つまり、第二部で触れる要吉殺害の動機、岡島との再婚話は、さと子にとって年齢的に人生をやり直せる最後の機会だったのだ。結婚適齢期の切迫感が、殺人というリスクを選択した彼女の事情に、ささやかなリアリティを与えている²。また、無難な8年間の結婚生活では、子どもを授かっている。これによって、さと子の貞淑さと要吉への愛情が証明され、公判では有利に働いていく（この8年間で要吉を知り抜いていることは、彼女の殺害計画のリアリティへと反転するが）。このように、さと子の結婚年齢、犯行時の年齢といった設定は、当時の結婚観から大きく離れず、物語内では不自然さはない。その一方で作品上では、そこに犯行動機が見え隠れするように注意深く作られている。

設定という観点から見れば、結婚までの経緯や要吉の性格なども作品上の仕掛けになっている。例えば、女専出身のさと子が戦前から終戦期まで働いていたという設定は、彼女の結婚、その後の再就職、そして要吉殺害に深く関わる。まず職場の出会いから要吉と結婚したという点だ。終戦当時から1950年代における結婚は6割以上が、お見合い結婚だ³。対して、さと子と要吉のような職場が結婚の出会いとなる職縁結婚が主流となるのは1960～1970年代の傾向である⁴が、男性不足から女専出身のさと子が働かねばならない戦前の環境は、徴兵されていない「どこか気の弱い青年」要吉との出会いを自然なものにしている。また男性不足の中、結婚相手の選択肢も少なかっただろう。戦後、復員してきた男性の復職による女性たちの一斉解雇、要吉の求婚と全てのタイミングが上手く符合し、二人は結婚した。つまり、戦争が結果的に二人の恋愛結婚を成立させている。

また、さと子も要吉も親、あるいは兄弟といった「家族」との関係が希薄である。旧制中学しか出ていない要吉は卒業後、親元を離れているのかもしれないが、女専出身のさと子は少なくとも卒業までは資金的に親が健在であった可能性が高い。が、そうしたことを匂わせる記述は、事件とは直接関係ないことだからか全くない。親族の不在によって二人の結婚の問題、つまり事件の背景は自然と夫婦生活のみへと焦点化されることになる。

ところで、この結婚は最初から不安要素を抱えている。旧制中学出身で学歴のない要吉は「先の出世の見込みのなさそうな平社員」…つまり、将来性がない。減首されるまではわずかながらも貯金できたということだが、要吉の社会的地位は社会経済、会社の経営状態に左右されやすく、要吉自身にも自立に役立つような特技もない。将来への見通しを立てられない相手を選ぶしかなかったことは、

さと子の不幸かもしれない。それでも、要吉は彼女に求婚し、彼女はそれを受け入れる。

ここで注目すべきは、要吉は女専出身のさと子に「何か憧れのようなもの」を持ち、さと子は「彼のその心に惹かれた」という点である。そしてさと子の20歳程度の若さが、弱く優しい青年の真心によろめかせる。しかし裏を返せば、要吉の高嶺の花への憧憬の思いが、さと子にとって心地よかったということでもある。戦後の女性たちの集団解雇を見れば、女性に知性は求められてはいなかった時代と言える。自身の知性に心を寄せる男の気持ちに反応するさと子の裏側には、男性社会で働く鬱屈があったのではないか。さと子が、要吉と結婚する上で不用心だった点があるとすれば、彼女に憧れるだけの要吉には将来性がないと見抜けなかった点だ。その弱さも、彼女の自尊心を満足させてくれるものとして、あばたもえくぼとなっていたのだろう。

興味深いのは、要吉とは真逆の、学歴もあり、自称「本当に、男らしい男」である岡島もまた、要吉と同じく、さと子の知性に惹かれた点だ。ダム工事現場付近に住む「知性も教養もない」百姓の娘とは違う「ひけらかすのではなく、底から光ってくる」知性を持つさと子。それは「顔まで綺麗に見えて来る」ほどと岡島は答えている。保険勧誘員になってからのさと子は、要吉や岡島など男たちを虜にする自分の知性や愛嬌を、自分から巧みに使って成果を上げている。仕事の成功によって、彼女は女専出身ならではの知性という自分の価値を再確認する。そんな中、そこに惹かれる男性が現れることは彼女の自尊心を更に満足させたに違いない。さと子が、無意識に自尊心をくすぐる男を求めていることは、自身の知性を頼みに犯行を計画する彼女の人間性とも響き合う。

(2) 保険勧誘の新規開拓から見えるさと子の知性

さと子が、最終的に生命保険の勧誘員へ落ち着いた経緯は、経済的な事情だが、結果的に彼女の才能を開花させた。「保険勧誘の容量は、根気と愛嬌と、話術」である。さと子は「さして美人ではなかったが、眼が大きく、並びのいい歯を見せて笑う唇のかたち」に見える愛嬌と女専出身のインテリさから「客に進める話し方にもどこか知的なものを感じさせ」る話術を持っていた。つまり、気の弱い要吉に求婚させたさと子の魅力は、そのまま仕事の才能へと転じていく。

そして、勧誘員のもう一つの要領である根気は、顧客の新規開拓の流れで発揮される。熾烈な競争の中、都内で新しく顧客を見つけることは難しい。そこで、彼女は、誰もが「気がつかなかった」ダム工事の建設ラッシュに目をつけ、仲のよい女性勧誘員を誘い、工事現場に出向くことにする。当時の女性が、旅費を自弁で日帰りの難しい場所へ行くことはリスクが伴う。それを根気でこなす点も評価すべきだが、ここで注目したいのは、ダム工事に目をつけたさと子の先見の明だ。

昭和2×年という要吉殺害の年からすると、作中のダムの建設ラッシュは、1950年代前半を指すだろう。戦後直後の日本の電力の7、8割は水力発電のため、1952年7月に「電源開発促進法」が施工された。同年9月には国家資本による電源開発株式会社が設立され、急ピッチで電源確保が進められる。この時期の代表的なダム、佐久間ダムは、10年にかかる工事を1953年に着工、1956年には完成と10年がかかろう工事をわずか3年で終えている。それを可能にしたのは、電力事業は最優先の国家事業にしたことだ。更に1953年の西日本被害などこの時期は水害も多く、治水の面でもダム建

設は急務であった。熊井彩乃によれば、電源開発株式会社社長の高碓達之は、従来の工法では建設不可能と考え、渡米先のアトキンソン社から学び、パワーショベルなど必要な大型重機を購入、技術者も招聘し、佐久間ダム建設にあたったとされる⁵。結果、佐久間ダムは大幅な工期短縮に成功し、同時期の北海道の糠平ダム⁶を始め、その後のダム建設の基礎となっていく。

おそらく、さと子はこうしたダム建設ラッシュについて新聞やラジオなどで見聞きしたのだろうが、さと子以外、誰もそれを顧客の開拓には結びつけなかった。それは、都会がダムによる電力供給に支えられていながら、都会の人間はそのことを忘れていからである。そういう中で、彼らの危険な仕事を察知したさと子には、他の者たちにはない機微、勘の良さがあると言える。一方で、あくまでビジネスとして割り切り、支払いが不確かになりやすい居住不定の日雇い労働者はその対象から外し、土建業者直属の技師、技手、機械係、現場主任など社員に限定した。ここからは、手堅い思考力と商才が窺える。更に男だらけの工事現場に行くゆえの用心として、仲の良い女性勧誘員を連れて行くことも周到な用意だろう。

このように、さと子はそれなりの勝算をもって、ダム工事現場を新規開拓の穴場と見立てたのである。つまり、彼女の目論見の成功は根気だけでなく、その裏に彼女の強かな計算があったと考えられる。こう考えると、いささか邪推が過ぎるが、連れて行った女性が彼女より年輩であることも用心だけでなく、彼女と並べば自分が勧誘員として魅力的に見られるという打算もあったかもしれない。なんにせよ、さと子は、保険勧誘員としての自分の魅力や才能を自覚的に最大限に使っている。

(3) 貞淑な主婦という幻想

前節で確認されたように、淡々と語られるさと子の仕事の成功までの経緯は、そのまま、さと子の完全犯罪を遂行する計画性と実行力を保証するものになっている。しかし、語りは、話し方に「知性を感じさせる」という雰囲気レベルに留められたり、女学校卒であることも「まずインテリの方で」と彼女の知性を抑えめに印象づけるように要素を並べている。

彼女の才を抑えめに表現することで、事件の焦点は、無能な夫に代わって一家を支える稼ぎを得なければならぬ主婦の必死さと哀れさへ絞られる。そして、収入が逆転し無職となった要吉が、さと子と反比例するように卑屈と鬱屈によって墮落していく様が挿入される。世のほとんど男性が働き、その収入が家庭を支える中心となっている当時⁷、無職の要吉は社会的に去勢された存在である。妻の経済的自立が、世間に体裁の立たない夫を自墮落に追いこむのは必然であろう。

先にも述べたが、夫婦関係は、社会に対しては閉鎖的である。それだけに、墮落していく若い夫をフォローしていくのは、結局、妻一人の役割となる。事件の経緯が悲劇的に見えるのは、夫をフォローする妻の献身がことごとく事態を悪い方向へと進ませることだ。さと子が、要吉の気鬱と卑屈さを心配し、進んで飲みに行かせれば、酒に溺れ、持ち直した生活が困窮するまでに使い込まれる。耐えかねたさと子との間との喧嘩が絶えず、要吉が妻子に暴力を振るうことも日常茶飯事だ。更にさと子が、安く飲ませるからと気を利かせて行かせた店の女主人、脇田静代と要吉は不倫関係に陥っていく。語りは、さと子が要吉と静代の接点を作ってしまったことから「あとの結果を考えると、それもいくら

かは、さと子に責任があろう」と一応は、彼女にも問題があったと指摘はする。しかし「いくらかは」と同情的な言い方に留めることで、彼女の善意によって起きた悪循環であることを強調する。

こうして、「家族のために昼夜を問わず働いたお金を夫に使いこまれ、困窮した挙句、子どもに暴力を振るわれ、耐えに耐え抜いた主婦が、子どもを守るために夫を発作的に殺害するに至った」哀れな事件は、起きるべくして起きたことになるのである。

ところで、この事件の経緯を間違いのない、確かなものとして保証するのは、さと子の供述書だ。語りは、事件当日の出来事については、彼女の供述書を見たほうが早いと投げているが、これは、語りが間接的に語るよりも殺人事件の臨場感がわかりやすく伝わるからであろう。しかし、彼女の供述を全面的に信用できるだろうか。例えば、要吉の墮落については、不倫、お金の使いこみなど状況証拠は多くある。しかし、それらが、即、墮落の原因が、収入の逆転、夫の権威の消失とはならない。また、供述書に出てくる要吉の言葉は要吉本人の言葉ではなく、あくまでさと子が夫婦喧嘩の流れで彼から聞いた話という間接的なものであることは注意すべきだ。さと子の供述の信憑性を支えているのは、他人は夫婦生活に口を出さないという社会常識だ。内実はどこまでも夫婦当人たちの中に隠蔽されている。この家庭の閉鎖性が、夫の家庭内暴力を隠すものとして機能することはよくあるが、本作の結末の場合は、さと子がこれを利用し、犯行を実行したのである。

要吉の墮落の原因とされるものは状況証拠だけで、さと子の証言や動機の客観性を担保しない。とはいえ、恐慌状態の幼子の証言はあてにならず、被害者の要吉は死人に口なしである。結局、さと子の供述書は、実際は一面的なものでしかないにもかかわらず、裁判で有効な証拠となっていく。

要吉殺害事件の中で確かな事実は、要吉の墮落したために、さと子が一家の収入の全てを担っていたこと、要吉が殺害されたということ、この二点だけであり、それらの因果関係は推測の域を出ない。したがって、事件の重要な証拠であるさと子の供述書は、どこまでも彼女に都合よく組み立てられた経緯でしかなく、作品というレベルでは信用に足らないことが仄めかされている。

事件の中で認知されている事柄を時系列に合わせて並べているだけに見える事件の経緯は、警察を通したことで、一見、矛盾なく配置されている。しかし、実はそれは、信用のおけないさと子の証言を軸に、他の要素で補強しているだけの脆弱なものだ。つまり、第一部で語られる「愚かで無能な夫に貞淑であるばかりに抑圧され、結局、子どもを守るために夫を殺害するしかなかった哀れな職業婦人の主婦」という悲劇的な経緯は、さと子による恣意的な物語でしかない。

したがって、その恣意性を意識して、検討すると、さと子にかかわる描写の裏には、新たな仕事を開拓できる計算高さや大胆な行動力、そして人心掌握能力の高さが窺える。更には、夫に尽くす貞淑の裏にも、インテリな自分に憧れる男性からの視線を欲する自尊心の高さといった面が見えてくる。本作で語られる事件の経緯には、世間に流通する物語の中に、巧妙に事件の真相につながる要素が隠されているのだ。

(4) さと子を事実上の無罪にした世論の形成

虚実を織り交ぜ、警察や報道機関を手玉に取ったさと子は胆の座った知能犯だろう。しかし、いか

な知能犯でも自らが作り出した悲劇のヒロイン像を広めることは出来ない。あくまで出来事を事件化するのには、警察という公権力と報道の信頼性だ。

それでは、警察もマスコミも、何故、さと子が語る悲劇的な職業婦人という物語に乗ってしまったのか。警察に関して言えば、さと子の供述を覆すだけの証拠が出なかっただけかもしれない。が、素人の岡島の推理からすれば「哀れな主婦」というバイアスがかかっていた可能性は充分にあるだろう。マスコミもまた新事実を見つけ出せなかった。しかし、警察とは違う視点を持つ彼らは別の視点があっても良かったはずだ。にもかかわらず結果は、婦人雑誌を中心に事件は大きく扱われ、悲劇のヒロイン像は増幅され、女性たちの同情という世論を生み出す。ここには、戦後、沸騰した家父長制への批判に乗り、事件を、「主婦は夫に従属するもの」という家父長制が生み出した働く主婦の悲劇で括るほうが売れるというマスコミの判断があったと考えられる。

その言説を牽引する一人として登場するのが、高森たき子である。事件当初から意見を述べ、「殊に婦人向きのものには、詳細に意見を書いた」彼女は、事件を「日本の家庭における夫の横暴さを示す」とし、要吉を「人間性のかけらもない」最悪の男と断じる。一方、さと子についても「高等教育を受け、相応の教養をもちながら」も、「誤った美徳的な妻の伝統観念」に支配された女性として、その蒙を啓くことで女性解放を訴えようとする。さと子の知性を、家父長制を上回ることでできないものとして矮小化することで、家父長制の根強さを語り、その打破を訴えるのだ。

たき子は、事件に家父長制という背景を与え、女性の解放という社会正義の実現という物語の一部にしてしまう。彼女の言動によって、結果的にさと子の知性も、家父長制を打破できないものとして矮小化され、目立たなくなるというのが興味深い。たき子の進歩的な女性という立場は、その他の目覚めていない女性たちのマウントを取ることで成立しているのだ。

こうしてさと子は、事件の悲劇的な加害者という主役の座から、貞淑かつ蒙に囚われた救うべき被害者へと周辺化されていく。公判の主役は、減刑嘆願書を裁判所に提出、更には特別弁護人も買って出るたき子へと移っていく。その象徴がたき子の「肥った和服姿は、被告の下をうつむいている姿と一緒に写真が新聞に大きく出た」ことである。自信に溢れ、意気揚々としたたき子に導かれる哀れな子羊のさと子という構図は、これまた報道によって強く裏書きされる。そして、公権力により認定され、報道が流布した悲劇のヒロイン像を、たき子が自分の女性解放運動の中に組み込んで利用することで、さと子は事実上の無罪を勝ち取ることになる。

結果、事件の主役に躍り出たたき子の名は「そのことによって一層高くなったように世間に印象づけられ」ることになる。つまり、たき子は事件を利用して最も利益を得た人物だと言えよう。勿論、彼女自身の事件に関わる動機は、義憤と使命感が主である。ただし、そこで得た名声は当然のものとして甘受してもいる。それは、後半、岡島への態度として滲み出る。たき子は自身の言動の社会的意義を信じるがゆえに自身の傲慢さには無自覚なのだ。

このように検討していくと、第一部で語られる事件の経緯は一見、俯瞰して事件に関する情報を時系列に並べて淡々と語られているようで、実は「何が須村さと子が無罪にしたのか」ということに焦点が当てられていることに気づかされる。第一部の事件の経緯とは、作られた「物語」に過ぎない。

しかも、それは二重に作られている。一つは、さと子が自身を無罪にするために作り上げた貞淑な妻の悲劇的殺人の「物語」だ。その要諦は、自分と要吉以上に夫婦関係の事実を知り得る者がいないということ巧妙に使った情報操作であり、世間を騙しきる悲劇のヒロインを演じる人心掌握術にあると言えよう。もう一つは、さと子の悲劇を利用したたき子を女性解放運動の先駆者とする「物語」だ。さと子の事件を使い、たき子は更に有名になっていく。それは、公判が作り上げた物語だ。どちらもマスコミが作り上げた虚像であることは、作品の最後に明かされることになるが、興味深いのは、その二重に作られた共犯的な「物語」の主従関係が、さと子を利用したたき子から、たき子を利用したさと子へと転倒するところにあるだろう。この点は、次章で検討しよう。

2. 都会の婦人評論家には見えない地方の現実

(1) ダム工事現場の男たちの憂鬱

事件後、岡島久男の訪問を受けたたき子は、その意図は気になるものの、健康的な体つき、「少年のような澄んだ瞳」といった見た目の雰囲気から好印象を抱き、なおかつ自身を賞賛する彼の言葉を聞き、簡単に気を許してしまう。男性を批判的に見て、男性社会と闘ってきた女性評論家にしては、いささか不用心と言えるだろう。彼女は一目見て、彼を素朴なブルーカラーの男性、つまり、知的な女性評論家を脅かすことのない存在であると高を括ったのである。岡島を自分より低い階層と見たからこそ、好ましいのだ。このことは、たき子が、社会正義を標榜しながらも、権威主義的な人間であることを仄めかしている。

その傲りは、岡島の賞賛に対して「社会正義ですよ。世論ですよ」と一応、謙遜はするものの、「それを推進させたのは先生」という言葉に「逆らわず」笑うところにも表れている。岡島の言葉は、さと子の公判を通じて、多くの支援者から何度も言われたであろう讃辞と同じものであろう。彼女はこうした言葉とその対応に慣れていて、だから、その讃辞を「聞き流す満足」という余裕もでき、無知な若者に見える彼の話を聞き、教えてやろうとする。それが「名士の持っているあの適度な自負的な鷹揚さなさが微笑」の正体である。名士という言葉が皮肉として効いてくるのは、その傲りと油断でとんでもない話を聞く羽目になるからである。

さと子や要吉の友人を「ちょっと知っている」という岡島は、さと子と要吉の肉体的な夫婦関係という他人からは踏みこみにくい話題を質問しながら、徐々に自分の推論を披露するようになる。彼は、要吉とさと子との間に肉体的な交渉がなくなった後に、要吉と静代の不倫があったという時系列から、二つの因果関係を読み解く。さと子が意図的に要吉が不倫する状況を訪問者の意外な質問と推理に意図を計りかねたたき子だが、評論家らしく裁判資料を思い出しながら、岡島の推理の根拠の薄さを指摘し、適切に対応していく。ただし、その態度は、岡島を無知とみての高圧的な物言い、細い目を光らせるなどいささか不遜である。

一方の岡島も、そういうたき子に対して、「なるほど」と一々、一度は納得して見せるものの、「しかし、思い通りにの結果になることもあります」と反論し、「そこには一つの意志が流れているように思わ

れます」とあくまでさと子の作為を確信した持論を曲げようとしな。たき子が、目から「敵意の光」を洩らしつつ、自身の「苛立たしさに動揺して」しまうのは、岡島の言葉に「太い芯」が感じられるからだ。つまり、高名な女性評論家に素人が質問するという体裁で始まったこの会話劇は、いつの間にか立場は転倒する。主導権は岡島にあるのだ。

明らかに自分の知らない何かを知っているこの男の正体が気になり始めたたき子は、「何処でさと子さんを知っているのですか？」と聞かざるを得なくなる。ここにきてようやく、岡島は自分がダム工事現場に勤めていると身分を明かし、自分たちの職業における身の上話とさと子の仕事ぶりについて順を追って話し始める。それは第一部で描かれたさと子の優秀な仕事ぶりを裏打ちするものであるが、その概要はたき子にとって既知のことであり、関心は薄い。

しかし、岡島の話には、ダム工事現場の男たちがさと子に向けた恋愛感情と、それが彼女の仕事の成功を支えていたということが語られる。愛嬌はあるものの「さして美人ではない」と説明されたさと子の女性としての魅力、たき子が接見や資料で触れた哀れな女性とは違う彼女の一面がそこにはある。たき子は、自分の知らないさと子の一面、そして岡島の確信にある「太い芯」の正体を知るため、岡島の話聞くしかない。

さて、ダム工事現場の男たちがさと子に夢中になったことには理由がある。それにはまず、ダム工事現場の男たちの境遇を考えなければならない。先にも述べたが、たき子の岡島に対する印象は、自分を脅かさな無教養な男性である。それは、ダム工事の技士という話を聞いても変わらない。だから、岡島の話に興味なさげに「閉じかかってい眼」で聞いている。

しかし、岡島は自分たちの仕事について「われわれは学校を出て、好きでこの仕事に入ったのですが、山から山を渡り歩いていると、さすがに都会が恋しくなります」と語っている。彼は工事現場という言葉から想像されるような日雇いの肉体労働者ではない。東京の大学を出た学士であり、インテリゆえにその専門性を活かせる技士になったのだ。しかも、この時期のダム建設は、日本復興の要となる国家事業である。岡島は、暗に自分のことを仄めかして次のように言う。

ダム現場には、もっと立派な沢山の人がいます。この仕事に生命を燃やしている男たちです。しゃれた言い方をすれば、重畳たる山岳の大自然に挑んでいる人たちです。それを人間の力で変える仕事です。本当に、男らしい男です。（「一年半待て」）

いささか岡島の自負が勝ち過ぎた言い方であるのは、自分のプロポーズをさと子が受け入れてくれたという事実が裏にあるのだが、それを差し引いても、使命感に溢れ、仕事に誇りを持っていることが窺える。その日を食いつなぐための仕事ではないのだ。だが、それだけに都会から断絶された山奥の無味乾燥な日常は、その身に堪える。山奥と東京とは行き来するには気軽な距離ではなく、交通の便も悪い。（さと子たちは泊りがけでここへ通った）。ダム工事現場とは、絶望的な陸の孤島なのだ。ましてや彼らは元々、都会の人間であったから余計に都会の匂い、空気に飢えてしまう。

そこへ現れたのが、東京の女性であるさと子たちだ。無論、彼女が保険勧誘という仕事のために来たことは、彼らにもわかりきっている。それでも、都会からは省みられないダム工事現場の男たちにとっては、来てくれたこと自体が奇跡だ。彼らが色めき立ち、心踊るのはごく自然な反応だろう。岡

島は、「山奥では、たしかに美人でした。彼女の話す言葉、抑揚、身振り、それは永らく接しなかった東京の女の人です」とその感動を語っている。これは、工事現場付近の無教養な村娘とは違う知性と愛嬌に溢れた都会人の明るさ、機知に富んだ会話が、男たちを虜にしたということだ。つまり、山奥で働くインテリらが抱える都会、東京への憧憬が、さと子を「美人」にしたのである。

(2) 岡島から見たさと子の一側面～さと子の強かさ～

頭の良ささと子は、彼らが自分に向ける憧れをよく心得、お菓子など簡単な東京の手土産を持ってくるなど、彼らを喜ばせ、それを保険契約へと結びつけていく。彼女の知性は新規開拓の場所を見出す先見の明に加え、人の心を巧みにつかむ臨機応変さと計算高さがあることは先述したとおりだ。彼女は、自分が他人からどう見えるかについて自覚的で、それを利用する人心掌握に長けている。

彼女の自覚的な人心掌握を端的に示す一つが、既婚者であることを隠して未亡人と偽ったことである。戦後からまだ10年経っていない時期だ。1954年に労働省婦人少年局が出した「全国の女世帯生活実態調査 25年報告書」によれば、戦争未亡人の「73%以下が30代である」とされており、さと子の嘘も彼らを信用させるに十分なものであった。当然、その境遇への同情だけではなく、独身の女性であるということは彼らに様々な期待をさせる。忌憚のない言い方をすれば、さと子は嘘をついて「女」を武器に取り入ったということになるだろうか。

たき子は、話がさと子のこうした言動に触れたとき、初めて目を開いて岡島を見る。たき子の知らないさと子がそこにあるからだ。あるいは、その言動の節々から窺えるたき子の貞操観念からすれば、さと子の行為はふしだらなものと映ったかもしれない。そのため、岡島は「こういう小さな欺瞞は許されるでしょう。彼女のビジネス上からの仕方ないこと」と庇い、さと子は言い寄る男たちに自分の住所を教えず、隙を見せなかったとも付け加え、次のように述べる。

さと子さんは、いつも微笑って、その誘惑をすり抜けていました。職業のために、相手に不快を与えないで、巧みに柔く逃げる術を彼女は心得ていました。彼女は決して不貞な女ではありませんでした。それは断言できます。（「一年半待て」）

ここには彼女の貞淑さが、言葉巧みに相手の心理を受け流す知性と技術力と胆力に支えられていることが窺える。彼女は簡単に男に従属するような女性でも、男に抑圧されてしまうような弱い女でもない。男の心を巧みにつかみ、自分の仕事の成果を上げていけるような、しなやかな強かさを持った女性なのだ。さと子の計算違いは、ただ一つ、岡島からプロポーズされたことだ。要吉と同じく、知性という自分が自覚する魅力に惹かれてくれ（それは彼女のプライドを満たすことでもある）、それでいて無能で弱々しい性質とは真逆の、岡島曰く「本当に、男らしい男」からのプロポーズ。それが、さと子の心をときめかせたことは、想像に難くない。彼女の生活は、フルタイムで仕事をし、家に帰れば家事と子育てと無能な夫への気遣いの繰り返しである。その閉塞感から逃れたいと夢見ることは不思議ではなからう。

かくして、彼女は、世を欺き、一年半の計画を立て、夫殺害とその準備に一年、公判で執行猶予を勝ち取るのに半年という計画殺人を実行することになる…これが、「一年半待ってほしい」というプ

ロポーズの答えを聞いた岡島の、おそらく真相に近い推理である。

そして、この殺害計画の動機が、無能な夫を抱えて働かねばならない職業婦人が、山奥のダム工事現場で働くインテリの男らを見つけ出したことに端を発することは重要だ。高森たき子のような東京で勇躍する女性評論家のように華々しい社会に生きる者たちが、気にも留めない世界、そういう場所でさと子は岡島からプロポーズを受ける。出会いこそ、保険勧誘員と顧客であったものの、それぞれが自分の閉塞的な現状を抜け出したいと願ったことが奇妙に符合した結果である。言い換えるなら、誰の目にも止められず、気にされることもない日常を生きる者たちのささやかな願いから、要吉殺害計画が始まったとも言えるだろう。ただし、不甲斐ないとはいえ、要吉に殺される罪はない。彼はあくまで愚かだが、計画に踊らされた被害者である。

3. 作品の標的は誰か～三者が痛み分けになる重苦しい結末～

(1) 高森たき子の誤算の原因～岡島が真相を語るという構成の意味～

さて、岡島から、さと子による故意の要吉の計画殺人の可能性を聞いたたき子は「蒼くなって、言葉も急に出なかった」という恐慌状態に陥り、証拠があるのかとあえぎながら問うことしかできない。彼女が、明確な反論を口にできないのは、彼女が読んだ膨大な資料の内容と岡島の推論との間に齟齬が無いからである。更に、ダム工事現場でのさと子と男たちの関係という裁判資料では知り得ない情報がその推論を補強している。彼女には、反証材料がない。そこに、岡島のプロポーズの答え「一年半待ってくれ」とのさと子の言葉が知らされ、止めを刺される。以降は岡島が去っていくまでの様子しか描写されない。既に呆然とし言葉がない状態になっているたき子をこれ以上、描く必要はない。

ここで考えておきたいのは、何故、たき子はさと子の計画殺人に気づくことができなかったかということである。それは、端的に言えば、たき子がさと子を理解しようとはしていなかったからだ。例えば、岡島の「何故、要吉を拒絶したのか」という質問に対して、たき子はまるで女性たちの代弁者のごとく「男というものは」「よくあるケースですね」という言葉を使って答えている。これは、さと子を代弁しているようで、その実は、たき子の知見による女性とはこうあるべきだというイメージをさと子に当てはめているに過ぎない。そもそも、当初から事件に関して一貫した意見を述べていたたき子は、最初からさと子をインテリでありながら家父長制に縛られた哀れな被害者としてカテゴライズしている。そして、哀れな被害者は救われるべき善性を持っていなければならない。たき子が、「およそ人間は、その人を見れば、私には分かりますよ」と己の直感を絶対視し、接見したさと子について「あの澄み切った瞳は純真そのもの」と断言していることから、彼女の思い込みは窺える。「純真そのもの」だからこそさと子を救われなければならない。たき子はそう使命感を燃やしたが、実はたき子の言う純真とは家父長制とは不可分の関係にある。何故なら、純真とは真面目で貞淑で善良な妻であるということだからだ。もしも、さと子が性に奔放な主婦であったのなら、たき子は特別弁護人を買って出てまで救おうとしたらどうか。

つまり、たき子は、女性解放を訴えながら、その理想の女性像は家父長制で尊ばれる女性というダ

ブルバインドに支配されている。そのことは、岡島が「生理」という言葉を使ったことに狼狽える、夫婦生活について肉体関係の有無について知ろうとしなかったということにも表れている。夫婦間のトラブルにおける殺人事件であれば、気にして当然の問題に目を向けないことは、性的なものをタブー視する彼女の無意識のなせる業であろう。そして、皮肉なことに、彼女が目を背けた夫婦の肉体関係の問題にこそ、(あくまで岡島の見立てではあるが) 事件の真相を解く鍵になっているのだ。謂わば、たき子の無自覚な古いモラルと思い込みが、さと子への眼差しにバイアスをかけ、真相から遠ざけていたのだ。

そして、そのバイアスは、さと子をたき子の下に位置づけることにもなる。それによって、さと子の強かな本性と高い知能という本質は、たき子の目から覆い隠されていく。つまりたき子こそが、誰よりもさと子を見くびっているのだ。だから、岡島からさと子の「計算が合ったといえば、いわゆる世論のことも一」と指摘されるまで、自分がさと子に利用されていた可能性にすら気づけない。岡島に誉めそやされて満足そうだったたき子からは、自分が世論を動かし、さと子を実無罪にしたという自負が窺える。しかし、実際はさと子が警察やたき子やマスコミを利用して、世論を作り出したのだ。見下していたさと子が、たき子を出し抜いたことは、彼女の自信を崩壊させるに充分だろう。

しかしたき子がしっぺ返しを食らうのは、彼女の個人的な資質や性格によるものだろうか。中尾香は、1950年代の『婦人公論』の論調について、次のように述べている。

「婦人公論」が「隷属的地位に戻ることに、すなわち封建的な女性のあり方を否定する一方で、「家庭という基盤を忘れがち」になってしまうこと、すなわち“ゆきすぎた解放”にたいしても否定的であったことが述べられている。そして、結局は「家庭にある妻の解放」あるいは家庭を重視した上での女性の解放が志向されてきたことが、強調されているのだ。(中尾香『〈進歩的主婦〉を生きる戦後『婦人公論』のエスノグラフィー』作品社、2009・3)

戦前から女性解放をテーマにしてきた『婦人公論』をして、非常に限定的な女性解放を唱えてきたという指摘は興味深い。理由こそ、結婚が女性の幸せだからという無邪気なものから、世間体という消極的なものまで様々であるが、少なくとも女性解放の議論は、女性は結婚するものであるということが、大前提になっていた。後に単行本化された際にベストセラーとなる伊東整「女性に関する十二章」(『婦人公論』1953・1～12)が結婚を見据えた恋愛講座として展開されたことも、こうした誌面の方針とは無関係ではないだろう。

つまり、たき子の無自覚なダブルバインドは、当時の婦人評論家や婦人雑誌のダブルバインドの在り様の表象なのだ。したがって、その矛盾から、石垣綾子が、1955年に「主婦という第二職業論」(『婦人公論』1955-2)を書き、第一次主婦論争を起こすことになるのは必然と言える。主婦論争は劇中の事件の年以降の出来事である。しかし「一年半待て」が1957年に発表されている以上、世情に敏感な清張が本作の高森たき子の造形に主婦論争への目配せをしている可能性は高いだろう。そして、こうした主婦論争について、駒野陽子が「一般の専業主婦にとってはピンとこない無縁の論争といったままで終わった」⁸と指摘するように、婦人評論家の言葉は、肝心の当時の一般主婦を置いてけぼりにした観念的なものであった。婦人評論家たちは、高邁な理想を掲げながらも、自らが抱え込んだ矛盾

を解消できないまま、肝心の一般の女性たちを救えなかったのである。

さと子にとっても婦人評論家、たき子の言動は、利用すべきものではあっても、冷ややかなものとして見ていたかもしれない。どんなにたき子が拳を振り上げようと、無能な夫と二人の子を抱え、山奥まで出向いて精力的に働き、家に帰れば家事全般をやらざるを得ないさと子の日常を救いはしない。もし、たき子の言動が、さと子を救えるのなら、彼女は要吉を殺さずに済んだはずだ。

ところで、机上の空論のような理想論が、現実の生活者を救わないことは、たき子が、実は現実の生活者が見えていないことを意味している。無自覚な思い込みとレッテル貼りによって、さと子を見たこともその一つである。このことは、さと子の事件の動機が、山奥のダム工事現場から始まったということと無関係ではない。時代の最先端を走る婦人評論家であるたき子の活躍は、当然、東京を中心とした都会がそのフィールドとなる。彼女にとって都会以外の場所は、せいぜい講演先か個人的な旅行先しかないだろう。少なくとも、ダム工事現場という男だらけの現場に足を向けることはなさそうだ。それどころか、岡島の話を書くときの眠たそうな目からは、寧ろ無関心であることが窺える。それは必然的に、さと子の公判のための情報を集める、証言の裏取りをするために現場に行くことも思いつかせない。

たき子は、山奥で地道に働く生活者の存在を想像すら出来ていなかった。そのため、裁判資料やマスコミといった間接的な情報とさと子の印象だけで物事を判断し、事件の裏にあるものに近づくことができなかった。一方、岡島は仕事とプライベートの中で、さと子を日常的なレベルで知っている。また、彼は自分の推理が正しいかどうかを検討するために、マスコミで報道されたものや裁判記録を見るだけでなく、要吉の知り合いなどのもとへ直接、その足で出向き、聞いて回っている。机上で集められた情報だけのたき子と、誰も知らない情報を自分の足で探してきた岡島。どちらの情報も地に足のついた確かなものであるかは、自明の理だろう。だから、たき子は、岡島の話をも反論できないまま、聞かざるを得ない。情報のヒエラルキーは、岡島が上なのだ。こうして社会的に上位にあるはずのたき子の立場は転倒していく。

第二部冒頭で日焼けして健康的な岡島と肥った名士であるたき子の体型が対比的に描かれていることも意図的なものだ。都会で活躍する名士であることに胡坐をかく人間の傲慢と地方で地道に生活をする人間の真摯さとの対比を示唆している。そして、そんな地方の男たちの存在を見出したさと子は仕事を成功させた。また、犯罪とはいえ要吉という寄生虫のような夫との関係からの脱出も実現せしめた。対して、彼らの存在を見ることもなかったたき子は結局、自分の名声と自信に傷をつけられることになる。夫に苦しむ無名の主婦と高名な婦人評論家という対照的な二人の間に起こる転倒の裏にもダム工事現場の男たちの存在がある。さと子は男たちの気持ちを巧みに利用することで、たき子は男たちを敵視、あるいは無視することで自身の立場を確保している。

ここまでの議論をまとめておこう。たき子は何故、さと子の計画殺人に気づくことができなかったのか。まず、婦人評論家の狭い知見から、さと子に哀れで蒙昧な主婦のレッテルを貼り、真正面から向き合わなかったことがあげられる。このことは、女性解放を目指す婦人評論家こそが、救うべき女性たちを訓育すべき無知蒙昧な人間として見下しているという矛盾を炙り出す。言い換えるなら、婦

人評論家の中に内在する、女性たちへの無自覚な男性的な目線が明らかになったのだ。男女平等の実現という社会正義を行っているという自負が、その傲慢な女性蔑視を覆い隠しているに過ぎない。見下して決めつけているがゆえに、たき子は、日々の暮らしに追われ必死に生きる多くの一般の主婦たちの実際を無視する。それは主婦たちを置いてけぼりにした議論に終始した1950年代当時の婦人評論家たちの失敗と相似の関係をなしているのだ。

加えて、たき子の無自覚な傲慢さは、岡島たちのような地方の現場で地道に働く人々に対しても同様だ。それは直接的な軽蔑ではなく、その存在を気にもしない無関心という形で表れる。つまり、一般主婦たちの現実と地方で働く男たちの現実が、たき子にとっての盲点となっていくのである。彼女の頭でっかちな理屈と裁判資料の鵜呑みで出来上がった机上の空論が、日々を必死に生きている生活者たちの現実によって覆され、手痛いしっぺ返しを食うのは必然である。たき子の無自覚な傲慢さは、その傲慢の矛先となっているさと子や岡島によってのみ罰せられる。この作品が、司法の権威ではなく、社会にとっては取るに足らない岡島という男によって、真相（らしきもの）が暴かれるのは、作品として論理的な帰結だと言えよう。

(2) さと子に怯える岡島

前節で検討したことから、本作が岡島によって真相が語られるという構成である意味は見えてきた。作品の標的の一つは婦人評論家という身分だ。果たして、高森たき子のプライドはズタズタになった。無論、一事不再理のおかげで、事の真相が表に出ることはないだろう。彼女の社会的名誉が傷つくことはないだろうが、彼女は真実を知ってしまった。今後、たき子は、己の過失を抱えたまま、これまでどおり活動できるだろうか。物語的にも作品的にも、炙り出された婦人評論家の抱える矛盾と傲慢さへの責任を突き付けていると言えるだろう。

また、計画的に夫を殺害し、実質の無罪を勝ち得たさと子は、殺害の動機であり婚約者である岡島に逃げられた。殺人犯に道義的な罰が与えられ、全ては、因果応報に収まったかのように見える。しかし、いくつかの疑問は残る。

一つは、岡島が何故逃げたかということである。次に、岡島は何故、たき子のところへ来たのかということだ。そして最後は、今後、さと子はどうなるのかということである。

それらを繕うためにまず注目したいのは、岡島がたき子に差し出した名刺である。その名刺は「左側の住所のところはなぜか墨で黒く消してあった」とある。後に、たき子に問われて「東北の山奥の△△ダム建設工事場で働いている者です。××組の技手です」と答えている。さと子が仕事で訪れたダムは、東京の近県の山奥であったから、東北となれば、それより遠い職場へ移ったのは間違いない。つまり、彼は前職を離れたため、修正した名刺を持っているのだろう。しかし、相手は初対面の有名人だ。礼を失しないよう新しい職場の名刺を差し出すのが、一般的ではないだろうか。

となると、作中で、居場所を「墨で黒く」消されていることが言及されているのは、自分の現状や居場所をさと子に知られたくないという思いを表す作品的な仕掛けだろう。さと子の特別弁護人だったたき子を通じて、さと子に自分の居場所を知られることを避けるためだ。そもそも、彼はさと子と

の関係について、婚約を破棄したという言い方ではなく「逃げた」と言っている。彼は、彼女に真意を問うことなく逃げ出したのだろう。途中、たき子に身分を明かしたのは不用意ではあるが、それはさと子が簡単に来られそうもない、より東京から遠い東北のダムへ転勤できたことへの安堵か、話しているうちにたき子がさと子の共犯ではないと確信したか、あるいはその場しのぎの嘘か。いずれにせよ、岡島が、かつて愛した女性を恐れているのは確かだ。

岡島は、さと子の知性溢れる愛嬌に好意を抱いた。だからこそ、その魅力と知性を使えば、殺人ができる、あるいはやれる行動力と根気を持った女性であることが分かってしまう。しかも、「一年半待ってくれ」という言葉から、夫殺害の動機が岡島からの求婚であることも、彼だけにはわかる。東京の大学を出るほどの知性を持つ岡島は、さと子を愛するがゆえに、恐ろしい可能性に気づいてしまう。

彼自身に罪はないとはいえ、慙愧の念もあったろうし、またさと子が犯人であることを否定したい気持ちも湧くのが自然だ。だからこそ、彼女が犯人であるという自分の考えを確かめるため、あるいは打ち消すために独自の調査を進めたのだろう。彼の推理が、弁の立つたき子に反駁の余地を与えないほどだったことを考えれば、相当に苦勞したと察せられる。そして、その努力虚しく、全てが彼女を殺人犯とする推理へと符合してしまったのは皮肉という他ない。彼の独自調査こそが、彼のさと子への愛情の強さを表しているからだ。

こうした岡島のさと子への思いの強さを考えると、さと子自身に彼の行きついた真相を第三者、立ち合いのもとで確認することもできそうだ。それでも、それができなかったのは、彼女が殺人犯だからという以上に、殺害を支えた彼女の性格や才能に恐れをなしたのではないか。例えば、さと子のタイトな執行猶予判決の計画の要には、夫殺害が正当防衛に見える状況とそれによってマスコミが同情的になることだ。彼女は、これらを実現するために、入念に計画を立て、状況と整えるため一年の長きに渡って計画を実行し、耐え抜いた。その根気自体も驚異的だが、その計画には、須村家を給食費が払えなくなるほど困窮させ、また自分ばかりか、二人の子どもを要吉の暴力にさらすことが含まれている。そこには、要吉から離れ、岡島と結婚し、人生をやり直す…そのためならば、子どもを犠牲にすることも厭わないさと子の自己中心的な酷薄さが窺える。岡島には明朗快活なさと子の裏の顔が見えてしまったことだろう。

また、さと子は要吉殺害後は一転して、哀れで愚かで貞淑な主婦を演じ続ける。愚かさを振る舞うことで世論をつかみ、それに乗じた婦人評論家も味方につけ、終始、判決が優位になるよう振る舞い、耐え続ける。つまり、世論を巻き込む巧みな芝居と周りを騙し切る大胆さ、これはダム工事現場の男たちを喜ばせ、保険の契約を勝ち取った人心掌握術と表裏をなすものだ。更にここに一事不再理といった法律の盲点を突く知識も加わる。彼女は、保険勧誘員だ。保険が法律とも密接にかかわる以上、法律を調べたりする機会も多いだろう。法律の知識を理解できる彼女が、一事不再理を知っていて、それを利用しようとするのは、さと子の職業柄、不自然ではないのだ。岡島が「あとは簡単に申し上げ」た推論は、起きた出来事を時系列に数珠つなぎにただけである。しかし、その無駄のない推論には、さと子が夫殺害から執行猶予になるまでに打った布石の数々が一々、納得できてしまったがゆえの確信がある。さと子の知性と愛嬌を実体験する岡島だからこそわかってしまうのだ。反駁できな

いたき子の態度が、その確信の強さを補強するのも皮肉だ。

つまり、岡島が愛したさと子の知性、愛嬌、行動力、粘り強さ…そうしたポジティブな魅力が、ことごとく、要吉を殺害し、無罪になるという長期計画を実現できる悪意へと反転していったのだ。そして、その反転の原因は、岡島との結婚という未来を願ったことにある。その思いを純真、純愛ということは可能だが、裏を返せば、ただ幸せになりたいというだけのその思いは強い執着へと変貌している。幸せへの強い執着は、相手が岡島であっても万が一、性格の不一致などよんどころない事情で結婚生活が困難になれば、それが殺意となり得ることを暗示している。愛情と憎悪は表裏一体なのだ。岡島が、第二の要吉にならない可能性はどこにもない。人間誰もその性格には裏表がある。執着によって、美德が悪意へと反転する。岡島は、そんな人間の深淵を、愛したさと子の遠大な殺人計画を通じて覗き込んでしまったのだ。

知的で朗らかだが特別、目立つわけでもない一般主婦に潜む自己中心的な欲望に戦慄してしまった岡島。彼が改めて会って、彼女の愛を確かめることもせずに逃げ出したのは、自身が次なる犠牲者にならないための自己防衛、生存本能だろう。だから岡島は転職して職場を変え、彼女が追ってこないよう名刺の住所も消して備えている。

とはいえ、岡島の推論はあくまで想像の域をでない。一方で真実か否かを確かめたいのも人情だろう。さと子と会うことなく、自身の推論に確信を得る方法はただ一つ。守秘義務から彼女のことを世間に暴露する可能性がなく、それでいて彼女の犯罪についてもっとも詳しいはずの特別弁護人、高森たき子。彼女に、自身の推論を話すことだ。これが、岡島がたき子のもとへ訪れた理由だろう。万が一、たき子の言葉から自身のさと子への不審が杞憂と分かるのであれば、それはそれでよい。岡島は逃げ回る必要がなくなる。ただし、さと子が無罪放免としたたき子が、さと子の共犯である可能性も考慮して、注意深く振る舞わねばならない。

このように考えていけば、住所を消した名刺も、また質問をぶつけては、たき子の反応に一旦、納得をして思案してから反論するという岡島のやや回りくどいやり取りの仕方にも納得がいくだろう。彼は、たき子を苛つかせたり、揶揄したいのではない。あくまで、自身が納得を得るためにそうしているに過ぎない。その悪意の無さは、全てを話し終えて去っていく岡島の目を「子どものような瞳」としてたき子が見返したことから客観的に保証されている。彼は、ただ自分の推理と判断の確信を得ただけであり、たき子を破滅させるつもりはない。だから、わざわざ「ご安心ください」と、この事件を蒸し返すことつもらがないことを言及している。たき子が、岡島の話に衝撃を受け、婦人評論家としての自負を打ち砕かれることは、彼女自身の問題であり、岡島の問題ではない。結果的には、さと子から逃げ回ることになった岡島が、彼女を無罪放免にしたたき子に一矢報いた形になるのは、運命の皮肉というものである。

さと子は岡島に逃げられ、たき子は職業的な立場を揺るがされ、そして岡島はさと子から逃げながら仕事を続けなければならない。事件は、この件で利益を被るはずだった三人の誰をも幸せにすることなく閉じられる。そして、何よりも恐ろしいのは、さと子、たき子、岡島の三人は、それぞれに要吉殺害の真相と思われるものとそれに関わった罪を抱えながら、この先の日常をずっと生きていくと

ということだ。後味の悪い本作の結末は、後には過酷な日常だけが残るという重苦しきの余韻がある。

(3) さと子の岡島への愛は本物か

それにしても、さと子から逃げ回らねばならないと感じている岡島の不幸は理不尽とも思える。確かに彼のプロポーズは、さと子に要吉の殺害を決心させた。しかし、彼はさと子を未亡人と思っていたのだから、そのプロポーズに道義的問題はない。また、最終的にさと子から逃げてしまったことも、犯罪者への恐れや怯えを考慮すれば、自己中心的で不誠実な対応と責めるのは酷だろう。さと子を愛してしまったことは、そんなに罪なのだろうか。

この先、岡島は、さと子が自分を追ってくることを恐れ、そして、人の深淵を覗き込んでしまったゆえの女性不信に苦しめられるだろう。結婚自体に懐疑的になり、孤独になるかもしれない。一事不再理ゆえに事件の真相は今後、公にならない。法と結婚という社会制度が、岡島のその後の人生を暗くする。

何故、作品は岡島にまで罪を背負わせるのか。一つは前章末尾で触れたように、人間は誰しもが過酷な日常から逃れようとして、かえってより過酷な現実を生きていくものである…人間社会の普遍的な辛さを描いた作品だからである。誰にもしかかる日常的な恐怖、それは等しく登場人物たちがその過酷さに追い詰められてこそ成立するだろう。

ただ、この結末にはもう一捻りあるのではないかと考えられる。岡島の怯えは、さと子が岡島を愛していることが大前提である。しかし、その前提は果たして確かなものだろうか。彼女の岡島への愛情めいたものは、さと子が岡島のプロポーズを受けたという岡島の言葉以上のものは出てきていない。プロポーズを受けたことが事実だとしても、彼女が岡島とどう愛を育んだのか、彼女が彼をどう思っているのか、それらは作中では全く描かれていない。もしも、岡島から説明されたとしても、それは彼女の直接の言葉ではないため、やはり実際のところはわからない。

つまり、岡島が逃げる前提となるさと子の岡島への愛情は不確かなものなのだ。ここでさと子の供述を確認しておきたい。岡島が「証人は居ないから、彼女の申立てに誇張があるかも分かりません」と指摘するように、供述は全面的に信のおけるものではない。しかし、作中における客観性の高い手掛かりがこれしかないため、一定の事実が含まれるとして、話を進める。

さて、さと子は岡島と結婚するために要吉を殺害するが、それは要吉がさと子と離婚してくれないからだ。そう考えると奇妙な点が、この供述にはある。静代と不倫を繰り返すようになった要吉は普段から「そのうち、お前と別れて、あの女と夫婦になるつもりだ」が口癖であり、事件当夜も「さと子に乱暴しながら「もうお前とも夫婦別れだ、静代と一緒になうからそう思うがよい、とおかしそうに笑い出して」いる。無論、売り言葉に買い言葉の側面もあるし、手続きは大変だ。しかし、要吉から離婚を切り出してくるのであるならば勿怪の幸い、少なくとも殺人というリスクは犯さず離婚できる可能性があった。それでも、彼女は計画を変更することなく、要吉を撲殺する選択をしている。

つまりさと子は、岡島との結婚を望むこと以上に要吉への殺意を優先しているのだ。このことは、彼女の要吉殺害の一番大きな動機は、無能な夫からの解放だったことを示している。岡島からのプロ

ポーズはきっかけに過ぎない。経済的に自立し、自分に言い寄ってくる男も多い中、無能な夫の存在はどんどん邪魔になっていく。かつては気に入ったその弱々しい面もいつしか憎むべき不甲斐なさへとつながったかもしれない。更に彼女はもうすぐ30歳になる。やり直すには今しかない。積もり積もった現実の夫婦生活に対する不満は、満杯まで水に満たされたコップと同じだ。その表面張力ギリギリのコップに起きた波紋が、岡島からの求婚だったのだろう。

また離婚となれば、彼女の側にも問題があったとされる可能性が残る。離婚が、男性よりも女性に不利益をもたらす意識は今も昔も変わらない。あくまで、可哀想な未亡人となることが、後腐れなく要吉を排除し、また世間の同情を一身に集めて、彼女のその後の人生を保証するものとなる。その後、岡島と一緒にあったとしても、周りから祝福されるはずだ。彼女は「可哀想な未亡人」だからだ。その立場を手に入れるために、そして夫から完全に切り離されるために、離婚よりも殺人を選択したと考えられる。純愛ではなく、あくまで自身の利益になる選択をしたさと子の冷徹さが顔をのぞかせる。

もしもさと子が、このような計算高さを持つ女性だったとすれば、岡島に逃げられたとしても、彼女が岡島に執着するとは限らない。世間からの同情票を集めたさと子であれば、仕事も再開できるだろうし、また公判時の支援者が再婚の良縁を紹介してくれるかもしれない。執行猶予になった彼女は、迫りくる30歳の壁はあるものの前途洋々と言えるだろう。要は彼女の気持ち次第なのだ。この場合、岡島は、自分自身を「男らしい男」だと思う自負から、さと子がとことん追っかけて来るといふ幻影に悩まされる滑稽な人物ということになるだろう。つまり、本作の結末は、たき子も岡島もさと子に利用され、翻弄されたということになる。その表向きの重苦しい結末の裏には、須村さと子の恐ろしさが潜んでいる。その恐ろしさが、好青年に見える岡島にも過酷な日常を歩ませるのだ。

おわりに～作中でさと子の実体がない意味～

「一年半待て」の第二部では真犯人であるさと子が登場しないが、そもそも本作には、さと子の実体は一度も登場していない。裁判資料、マスコミによる報道、たき子の印象、岡島による伝聞…全て間接的に表現されている。「顔」や「張り込み」に材を取るまでもなく、清張作品においては、しばしば、作中の中心人物を間接的に描き、その人物の実体を読者につかませない表現が取られるが、本作においては、それが徹底されていると言える。

例えば、要吉の不倫相手が静代と知ったとき、供述書では「彼女は仰天し、無性に腹が立った。信じられない、とその人には言った。さぞ、ばかな顔に見えたであろうが、それが理性だと思って感情を出るのを抑えた」と語られている。しかし、岡島の集めた反証によれば、さと子が要吉と静代とを結ぶように仕向けている。だとすれば、さと子が驚くことも、腹を立てることもない。結局、この描写で事実と認定できるのは、近所の人が要吉の不倫を伝え、さと子が「信じられない」と答えたことだけだ。ここだけは、近所の人証という裏が取れているはずだからである。第一部の語りの中で描かれる彼女にすら信はおけない。さと子の供述を基本に組み上げた間接的な情報の集積に過ぎないからだ。さと子の作った悲劇のヒロイン像に警察や報道や婦人評論家はその像を補強し、流通させた

ものだ。つまり劇中の人物ばかりか物語外にいる作品の読者もさと子に騙されるというメタ構造が、本作の第一部の特徴だ。

それを覆す岡島の話は、第一部に隠れされている都会と地方という社会の問題点、婦人評論家の抱える矛盾を炙り出す効果を持っている。が、その一方で彼の視点からのみ語られる純愛を貫こうとしたさと子も虚像に過ぎない。第一部でも第二部でも、さと子が本当は何を考えていたのかは曖昧なままにされ、読者にその判断は委ねられている。

それでは、この作品は何を描いた作品なのだろうか。作中で実体のない須村さと子によって、登場人物も作品も支配されていることを考えれば、さと子の人物設定が重要だ。彼女は、やや知的ではあるものの、無能な夫を抱え、日々を汲々とする主婦である。抱え込んだ夫への不満を持って余しながら、日々の生活に追われる主婦というのは、読者から見て等身大の一般的な存在であろう。彼女らは、その存在が地味なだけに、世間から注目されることもなく、経済活動に邁進するだけの社会の中へ埋没していく。だが、本当に彼らの情念や欲望は無視されてよいものなのか。男性を中心とした社会構造やそれに抗う婦人評論家たちだけが、この社会を作っているのではない。彼女たちの地道な日々の生活もまた社会を支えている。

須村さと子は、そんな偏った世界で自らの幸せのためならば、何でもやっていくという恐るべきバイタリティを見せる女性だ。彼女は、机上の空論を振りかざす婦人評論家の欺瞞も、彼女に寄生するしかない夫の無能とその背景にある家父長制も、そして、哀れな存在に対して本当は冷たく無関心な社会も、その全てを出し抜き、生きていこうとする。

さと子のような女性の在り様は、矛盾に無自覚な常識的な世間知では容易につかみきれものではない。だからこそ、実体を描かず読者の想像を掻き立てる描き方を採用し、それを効果的に機能させるよう構築されているのだ。つまり、社会を利用し、その枠からはみ出ても幸せになろうとする女性の執念を仄めかす悪漢小説の側面を持つのが、この「一年半待て」なのかもしれない。

そんな実体をつかめない女性を、追い詰められた女性の悲劇的な純愛と殺人として読み解き、流通させたのが、テレビドラマだ。実体がない須村さと子を、映像として焦点化していくこと自体が、原作に対して批評的なドラマを作り出す可能性とも言えるが、果たしてそれはどのようなものなのか。そのテレビドラマ化の改変を支える力学とは何か。それについては、別稿を用意したい。

注

- 1 石垣綾子「職業婦人と婚期一もっと男狩りをやりなさい」（『文藝春秋』1954・2）
- 2 因みにさと子が要吉と結婚したのは19、20歳という計算になる。疑問を持たれるほどの違和感はないものの、1950年代の初婚の平均年齢23歳よりもやや若くなってしまったのは、結婚当時の年齢が設定として重視されたのだろう。
- 3 「第16回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」（2021）による。
- 4 岩澤美帆・三田房美「職縁結婚の盛衰と未婚化の進展」（『日本労働研究雑誌』2005・1）によれば、結果的に第2次ベビーブームを生む結婚ブームを支えた職縁結婚であり、これがお見合い結婚と入れ替わっていった。しかし1990年以降、これが激減し、男女が出会うコミュニティが減ったことが、現在の未婚率の高さと晩婚かにつながったとしている。

- 5 熊井彩乃「土木遺産の香(第74回)戦後の土木技術の原点「佐久間ダム」静岡県浜松市／愛知県豊根村」(『建設コンサルタンツ協会会誌』2018・4)
- 6 同ダム建設でも、電源開発株式会社から大型重機の貸与が行われている。(『大林組八十年史』(大林組1972)参照)
- 7 1955年の高等小学校出身の男性の就業率は92%、女専出身の女性の就業率は52%である。(労働省婦人少年局編『婦人のあゆみ30年』労働法令協会1975・10)
- 8 駒野陽子「『主婦論争』再考——性別役割分業意識の克服のために」上野千鶴子編『主婦論争を読むⅡ全記録』1982